『古代史の争点』TOKYO出版記念講演会　　2022年7月31日

九州王朝の仏教　から王朝交代を語る
我が国にあった王朝交代

１、中国正史と全く食い違う『日本書紀』『古事記』

２、記紀にある天皇称号は、『魏書』に倣ったもの

３、『続日本紀』が正直に語る王朝交代
　①文武天皇即位の宣命文

１、２、３、は、和泉史談会(2022年7月12日)の講演と差し替え。文武天皇即位の宣命文と不改常典を追加しました

４、九州王朝最後の天皇の足跡がお寺の金石文に残る
　①野中寺弥勒菩薩像銘が示す「中宮天皇」
　②薬師寺東塔擦管銘が示す「中宮天皇」と「大上天皇」

服部静尚

和泉史談会　　2022年7月12日

我が国にあった王朝交代

— 教科書では教えない古代史 —

1、中国正史と全く食い違う『日本書紀』『古事記』
2、記紀にある天皇称号は、『魏書』に倣ったもの
3、『続日本紀』が正直に語る王朝交代
　①文武天皇即位の宣命文

②大宝建元記事（本講演では論じません）

③大宝律令は前王朝律令に准正した（本講演では論じません）

休憩後の「**九州王朝の仏教から王朝交代を語る -- 4、九州王朝最後の天皇の足跡がお寺の金石文に残る**」は、7月31日『古代史の争点』TOKYO出版記念講演会での講演です

服部静尚

1

中国正史に見える倭・倭国とは

①前漢(BC206年~8年)　楽浪海中に倭人有り、分れて百余国、歳時を以て来りて献見す。

②後漢(25年~220年)　倭は韓の東南の大海中に在り、山嶋に依って居を為す。
～建武中元二年倭奴国奉貢朝賀、～光武賜以印綬。

③魏(220年~265年)　倭人は帯方の東南の大海中に在り。山島に依って国邑を為す。

④宋(420年~479年)　倭国は高麗の東南の大海中に在り、代々朝貢する。
～倭讃、～弟珍立、～倭国王済、～倭王世子興、～弟武立、

⑤隋(581年~618年)　俀国は百済・新羅の東南に在り、～大海中の山島に依って居する。
魏時、訳通中国。～有阿蘇山、其石無故火起接天者、

⑥唐(618年~907年)　倭国は古の倭奴国。新羅の東南の大海中に在り山島に依って居す。
日本国は倭国の別種。日本は元小国であったが、倭国の地を併合。
其国の境界は東西・南北各数千里、西・南の境は大海に至る。
東・北の境界には大山が有ってこれを限とする。山外は毛人の国。

倭国のことを、共通して
大海の中にある島国であると記述している。

九州だ！

2

①漢書：楽浪海中に倭人有り、分れて百余国、歳時を以て来りて献見す。

②後漢書：倭は韓の東南の大海中に在り、山嶋に依って居を為す。～倭奴国奉貢朝賀、～光武賜以印綬。

漢委奴國王

漢の倭の奴の國王

③三国志：倭人は帯方の東南の大海中に在り。山島に依って国邑を為す。

④宋書：倭国は高麗の東南の大海中に在り、代々朝貢する。 倭讃・弟珍立・倭国王済・倭王世子興・弟武立

⑤隋書：俀国は百済・新羅の東南に在り、大海中山島に依り居す。魏時、訳通中国。～有阿蘇山、其石無故火起接天者、

⑥旧唐書：倭国は古の倭奴国。新羅の東南の大海中に在り山島に依って居す。
日本国は倭国の別種。日本は元小国であったが、倭国の地を併合。其国の境界は東西・南北各数千里、
西・南の境は大海に至る。東・北の境界には大山が有ってこれを限とする。山外は毛人の国。

倭・倭奴国・倭国・俀国という表現で、同じ伝統を継ぐ国として記述している。
これに対して明確に、日本国は倭国とは別の国として記述している。

3

旧唐書に見える倭国と日本国

倭国は、古の倭奴国なり。～新羅の東南の大海の中に在り。山島に住んでいる。

日本国は、倭国の別種なり。
～あるいは云う、日本は元小国であったが、倭国の地を併合した。
其の国の東西・南北の範囲は各数千里で、西と南は大海を境としている。
東と北は大山があって、これを境とする。大山の向こうは毛人の国である。

（中国側からの目で見ると）
紀元前の時代から、倭国があって、
七世紀まで我が国を代表する国だった。
これが唐の時代になって、
白村江戦以降、703年以前に、
日本国が倭国を併合

4

1、中国王朝の歴代正史に出てくる　倭国は全て島国

2、 ①金印を授けられた倭奴国
②邪馬壹国の卑弥呼
③倭の五王（讃・珍・済・興・武）
④日出処天子　　⇒　すべてが九州

3、「その倭国を日本国が併合した」 と旧唐書が証言

ところが、日本の正史『日本書紀』には、

神武天皇が橿原の地で、初めて天下を治めて以来、
天武・持統天皇まで、大和・畿内に都を定め治めてきた。

ここには、歴代中国の正史が描く倭国とは異なる日本の古代の姿がある。

中国史書はデタラメを書いている。記紀こそが正しい！
これが、文献史学者が邪馬台国畿内説を支持する理由

5

神武天皇が始めて、この国の橿原の宮で天下を治めて以来、代々の皇都も皆、
大和の国の内にあるに決まっている。

（魏志にある）中国へ使いを送った記録は、真の皇朝の使いではなく、筑紫の南の方の熊襲などの類いだろう。

（隋書にある）倭王遣使と言うのも、真の皇朝の使いにあらず、韓人とか、西のほとりの国人がみだりに言うのを聞いたのか。
あるいは中国から使いが来たが、ただ筑紫に渡って、西方の端を見ただけで、詳しい事を知らずに書いたのだろう。

本居宣長

つまり、中国正史にある倭国は、大和朝廷とは別の国だ。

6

中国史書にある倭国とは、襲国つまり熊襲の国だ。
彼らは、
①城郭を築き、②漢字を使い、③王を自称して、
④国号を立て、⑤中国と通じ、⑥新羅と関係を持ち
⑦あるいは侵略し、⑧暦を作り⑨年号を作り、
⑩寺を建て、⑪銭を鋳った。

つまり、大和朝廷とは別の倭国と言う国があった、そう考えざるを得ない。

千有余年を経て栄え、
元正天皇の養老４年（720）の征西で、遂に滅んだ。

鶴峯戊申
宣長に影響を受けた

普通に学問として古代の研究をすれば、
皇国史観の本居宣長や鶴峯戊申でさえ、
このような結論になる。

7

日本書紀や古事記に書かれていることと、中国正史の伝えることが全く違う！

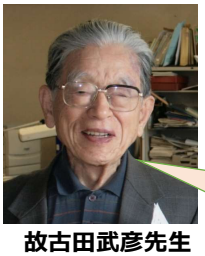
万世一系の日本であるのだから、中国正史に書かれた「倭国」は「熊襲」だ、本居宣長・鶴峯戊申はこう考えた。

ところが、明治以降の歴史学者は、（時の政権に忖度したのか）中国正史をデタラメとし、
倭国はヤマト王権のことで、あくまで記紀が正しいとした。

戦後、皇国史観は否定されたが、なんとこの見解は現代も引き継がれているのです。

中国の正史は全く出鱈目だ、信用できない。
でも、そこに書いてある「邪馬台国」や卑弥呼、
倭の五王の部分だけは歴史事実として使おう。

これが、現在の文献史学です。



故古田武彦先生

日本書紀・古事記と、中国正史に書かれた日本、どちらが信用できるのか？
私たちは経験している　戦前の「大本営発表」軍部にとって都合良いように事実
がねじ曲げられていた。これが昭和20年８月15日以降、明らかになった。

中国の正史も、日本の正史も、政権にとって都合の悪い所は嘘を書く。どうでも良い所
は事実を書く。中国にとって、日本は周辺諸国の一つ、嘘を書く理由が無い。
正史に嘘・誤謬があれば、編纂者は処罰される。

8

では、記紀に現われる天皇の記事はどう説明するのか？

『古事記』『日本書紀』にある天皇称号は、『魏書』に倣ったものだ。

701年に王朝交代を果たした近畿天皇家が、九州から畿内に侵入し、橿原を本拠とした一豪族であったイワレヒコ（神武）から、権勢を拡大したウノノサララ（持統）に至る先祖家長に、記紀で天皇の称号をおくったのだ。

神武天皇の親は天皇では無い。
神武天皇は九州から来て橿原宮で初めて天皇となった。

しかし、神武が日本列島を治める天皇だったと考える人はいない。

記紀をそのまま信用すると、神武天皇は九州から来て、橿原宮周辺を本拠とした侵入者の一豪族だ。

なぜ、記紀は神武天皇を天皇と称号したのか？⇒⇒『魏書』に倣ったのだ。

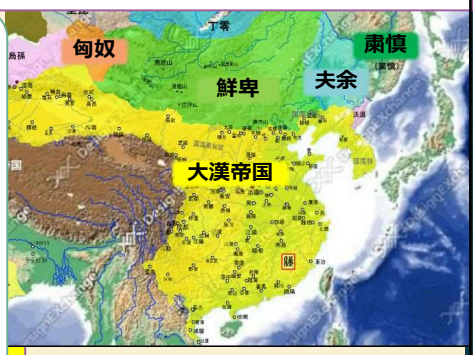
9

中国の古代王朝

～紀元前1600年	夏	漢族
～紀元前1000年	殷	漢族
～紀元前800年	周	漢族
～紀元前200年	春秋・戦国	漢族
～西暦8年	秦	漢族
～西暦220年	前漢／新／後漢	漢族
～西暦265年	魏・呉・蜀	漢族
～西暦420年	晋	漢族
～西暦502年	北魏	鮮卑族
～西暦557年	西魏／東魏	鮮卑族
～西暦589年	北斉／北周	鮮卑族
～西暦618年	隋	鮮卑族
～西暦907年	唐	鮮卑族
	宋／斉	漢族
	梁	漢族
	陳	漢族

歴代王朝は天命による王権奪取、あるいは禅譲という大義名分で王朝交代を正統化してきた。

鮮卑族は北方の騎馬民族であって、北魏皇帝の先祖はその部族長だった。



北魏皇帝は王朝の大義名分のため先祖の部族長時代から皇帝だったとした。

10

北方の騎馬民族である鮮卑族が
漢中に侵入し、建国した北魏の
初代皇帝（道武帝）は、
その先祖（ただの部族長）に
皇帝の称号を贈った。

雲崗石窟

魏書（554年魏収作）

昔、黄帝に25人の子がいた。
その内の1人が北土に封じられ大鮮卑山に建国した。
そこから67世、成皇帝（拓跋毛）が即位した（部族長になった）。
さらに81世の始祖神元皇帝（拓跋力微174~277）が即位し、
261年、魏と和親を結んだ。その後、
398年92世の太祖道武皇帝が北魏を建国した。

11

『日本書紀』に現われる天皇記事の見方

記紀にある天皇称号は、中国史書『魏書』（554年）に倣ったものだ。

①『日本書紀』の記事は全くの捏造ではなくて、先行する史書・伝承の（時・場所・主語などの）一部を入れ替えて作られている。
②天皇は、九州王朝天子・倭王の称号の一つ。※
③一方、記紀は近畿天皇家先祖に天皇称号を贈った。

※『令集解』儀制令：古記云　天子祭祀所称。～天皇詔書所称。
～皇帝華夷所称。～陛下上表所称。

『日本書紀』に現われる天皇記事には、
指針A、倭王の記事を近畿天皇家先祖に置き換えたものと、
伝承された近畿天皇家先祖の記事が混じっている。
併せて、
指針B、歴代天皇の即位記事は創作と考えるべき。
指針C、当時の倭王の名は、記紀にほとんど登場しない。

12

『続日本紀』が正直に語る王朝交代　①文武天皇即位の宣命文

文武天皇即位の宣命文を読めば、九州王朝天子より禅譲されたことが判る。

持統十一年（六九七）八月

詔曰。

現御神〈止〉**大八嶋國所知天皇大命**〈良麻止〉**詔大命**〈乎〉（あきつみかみと　おおやしまくにしらしめす　らまと）**を**

集侍皇子等王等百官人等。天下公民諸聞食〈止〉**詔。**（うごなはりはべる　ききたまへと）

高天原〈尓〉**事始而遠天皇祖御世御世中今至**〈麻弖尓。〉

天皇御子之阿礼坐〈牟〉**弥継継**〈尓〉**大八嶋國将知次**〈止。〉

天〈都〉**神**〈乃〉**御子随**〈母〉**天坐神之依**〈之〉**奉**〈之〉**随。**

聞看來此天津日嗣高御座之業〈止。〉

現御神〈止〉**大八嶋國所知倭根子天皇命授賜**〈比〉

負賜〈布〉**貴**〈支〉**高**〈支〉**廣**〈支〉**厚**〈支〉**大命**〈乎〉

受賜〈利〉**恐坐**〈弖。〉

此〈乃〉**食國天下**〈乎〉**調賜**〈比〉**平賜**〈比。〉

天下〈乃〉**公民**〈乎〉**恵賜**〈比〉**撫賜**〈牟止奈毋〉

随神所思行〈佐久止〉**詔天皇大命**〈乎〉**諸聞食**〈止〉**詔。**

是以百官人等四方食國〈乎〉**治奉**〈止〉**任賜**〈幣留〉

國々宰等〈尓〉**至**〈麻弖尓。〉

天皇朝庭敷賜行賜〈幣留〉**國法**〈乎〉**過犯事無**〈久。〉

明〈支〉**淨**〈支〉**直**〈支〉**誠之心以而御稱稱而緩怠事無**〈久。〉

務結而仕奉〈止〉**詔大命**〈乎〉**諸聞食**〈止〉**詔。**

故〈乎〉**如此之状**〈乎〉**聞食悟而款将仕奉人者**

其仕奉〈礼良牟〉**状随。**

品品讃賜上賜治将賜物〈曾止〉**詔天皇大命**〈乎〉

諸聞食〈止〉**詔。**

日本国を統治する天皇が、ここに集まる皇子等王等百官人等天下公民の諸に対し、大命の詔をするので承れ。

高天原に始まり遠き天皇の祖から今に至るまで、天皇の皇子に継承して、天つ神の御子として、**天つ神から委託を受けて行使してきた統治権**を、今日本を統治してきた**倭根子天皇命から授かった。**

畏れ多くも高き広きこの大命を受けて、この国を統治し、天下公民に恵みて安らかにするという天皇の大命を詔す。

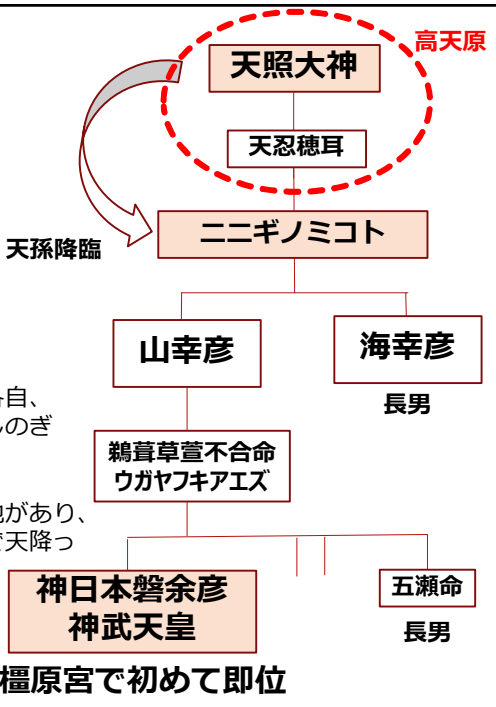
ここに百官等は、国の隅々、任を受けた国宰に至るまで、国法を過ち犯すことなく明浄の正直な誠の心で、緩めず気を張って務めるよう大命を詔す。

この詔を聞き仕える人には、各に応じて位階を昇叙する。

13

記紀の立場は、神武を初代天皇としている。

神武の父ウガヤフキアエズは天皇ではない。彼が天つ神から委託を受け、その統治権を行使していたとは見えない。**記紀が示す統治権**、これを天皇権と言い換えると、**これは神武天皇からであって、高天原からではない。**



「邑には君有り、村には長有り。各自、境を設け互いにしのぎを削っている」
老人に聞くと、
「東に美しい土地があり、そこに天の磐船で天降ったニギハヤヒがいる」
「我々もそこへ行こう」

14

①文武天皇即位の宣命文

持統十一年（六九七）八月、

日本国を統治する天皇が、
ここに集まる皇子等王等百官人等天下公民の諸に対し、
大命の詔をするので承れ。
高天原に始まり遠き天皇の祖から今に至るまで、
天皇の皇子に継承して、天つ神の御子として、
天つ神から委託を受けて行使してきた統治権を、
今日本を統治してきた**倭根子天皇命から授かった。**
畏れ多くも高き広きこの大命を受けて、この国を統治し、
天下公民に恵みて安らかにするという天皇の大命を詔す。
ここに百官等は、国の隅々、任を受けた国宰に至るまで、
国法を過ち犯すことなく明浄の正直な誠の心で、
緩めず気を張って務めるよう大命を詔す。
この詔を聞き仕える人には、各に応じて位階を昇叙する。

岩波注他、
この宣命文の「倭根子天皇命」を持統天皇とする。
しかしこれは全く違う。持統天皇の名とは違う。
倭根子の部分は死後の諡だ。
生きている人に死後の名で呼ぶはずがない。

『日本書紀』鵜野讃良皇女（うののさららひめみこ）、高天原広野姫天皇（たかあまのはらひろのひめ）
『続日本紀』高天原広野姫天皇、七〇二年に崩御し、
七〇三年十二月の火葬の際に、
大倭根子天之広野日女尊（おおやまとねこあまのひろのひめのみこと）と諡される。

15

元明天皇即位の宣命文

念のために、文武天皇の死後に即位した
文武の母、元明天皇の即位宣命文も見ておこう。

慶雲四年秋七月壬子。天皇即位於大極殿。詔曰。
此の国を治める倭根子天皇が詔する。親王・諸王・諸臣
百官人等の天下の公民はこれを聞くように。
かけまくもかしこき**藤原宮御宇倭根子天皇**が、
丁酉（六九七年）八月、此の業を**日並知皇太子の嫡子**に、
今の天皇に授けられ、天下は治められてきた。
これは、**近江大津宮御宇大倭根子天皇**の天地・日月と
共に遠く長く**不改の常典**と承って行われてきたものだ。
去年十一月に我王、朕の子天皇より「朕は病気なので
譲位する」と言われたが辞退した。しかし何度も勧められ、
今年六月十五日に至って、これを受けた。～

岩波注他、通説の解釈は一定している。
①藤原宮御宇倭根子天皇を当然持統天皇とする。
しかし先に示した通り、倭根子は持統天皇では無い。
九州王朝最後の天皇である。
②近江大津宮御宇大倭根子天皇を天智天皇とする。
しかし天智天皇の名は、葛城皇子・中大兄皇子・
天命開別天皇（あめみことひらかすわけの）であって、大倭根子では無い。
ここに天武天皇が出てこないことも不思議である。

大倭根子天皇は、白鳳・朱雀の九州王朝、中宮天皇だ。
中宮天皇は本薬師寺完成を待たずに亡くなり、
倭根子天皇は、これを継いだ朱鳥・大化の大上天皇だ。

16

参考

日本書紀	在位年	九州王朝の天皇	根拠
孝徳天皇	645年～654年	伊勢王	正木氏の説による
斉明天皇	655年～661年		
天智天皇	662年～671年	中宮天皇 ⇕ 大倭根子天皇	①野中寺弥勒菩薩像銘 の中宮天皇 ②『懐風藻』の太后天皇 ③『大安寺伽藍縁起流記資財帳』 の仲天皇
天武天皇	672年～686年		
持統天皇	687年～696年	大上天皇 ⇕ 倭根子天皇	薬師寺東塔擦管銘の大后天皇
文武天皇	697年～		

17

不改の常典とは

通説では「不改常典は天智天皇が初めて定めた」となる。天智では無いし、初めてと言うのも違うのではないか。

なぜならば、

①近江朝で「不改常典」が初めてできたとすると、「今後改めてはならない」と言って定めたことになる。

「こうこういう理由で定めた」という所が無いのだ。

「天地と共に長く日月と共に遠く昔より、改めずに守られてきた常典を示して」が普通の解釈だろう。

◆慶雲４年７月「近江大津宮御宇大倭根子天皇ノ与天地共長与日月共遠不改常典ト立賜ヒ敷賜ハル法」

②不改常典を「立て」賜うとあり、「定め」賜うではない。『続日本紀』では、「定朝儀之礼」「令諸国定牧地放牛馬」「選定律令」「始定藤原宮地」等々、こういう場合は「定」の字を使う。宣命文に限ると、聖武天皇の即位の宣命までは「立」を使っている。

◆神亀元年（七二四）２月「淡海大津宮御宇倭根子天皇ノ万世二不改常典ト立賜敷賜」

ところが、孝謙天皇の即位宣命に至ると「定」となる。

◆天平勝宝元年（七四九）７月「近江大津ノ宮二御宇シ天皇ノ不改ジキ常典ト初賜ヒ定賜」

この時期になると、明らかに近江大津宮御宇天皇が不改常典を初めて定めたとなる。『日本書紀』で、大和朝廷が監修した歴史が確立し、その直後は仕方ないものの、その二十九年後この頃には、近江大津宮御宇天皇＝天智とし、不改常典を天智に紐付ける解釈が定着できたのではないか。

※「不改常典」とは、大倭根子天皇が定めたものではなくて、九州王朝に代々伝えられた、後継の条件ではないか。例えば、何親等までとするか、倭系・天系に限定するとか等々。

18

４、九州王朝最後の天皇の足跡がお寺の金石文に残る

①野中寺弥勒菩薩像銘が示す「中宮天皇」

②薬師寺東塔擦菅銘が示す「中宮天皇」と「大上天皇」

野中寺
弥勒菩薩像銘
に『中宮天皇』

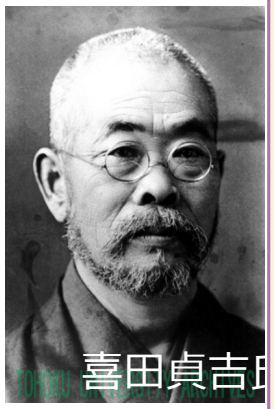
薬師寺　東塔擦菅銘
に『中宮』

本薬師寺跡

①野中寺弥勒菩薩像銘が示す「中宮天皇」

天智・天武の時代に九州王朝の女帝がいた

『後淡海宮御宇天皇論下』　喜田貞吉1922年



1、天智紀に**天智天皇崩後には皇后即位すべし**との条件で大海人皇子は即位辞退している。

2、天皇崩後に皇后が即位する実例が、この前後に（推古・皇極・斉明・持統と）**多い。**

3、『懐風藻』の釈智蔵の伝**に「太后天皇」が現われる。**
この時期に太后天皇とあれば倭姫王皇后以外に無い。

4、大安寺伽藍縁起流記資財帳に現われる**「仲天皇」**も女帝であって、倭姫王皇后である。

天皇、筑紫朝倉吉に御幸し崩じたまわんとする時、（中略）
仲天皇は「妾も我妹（せうと：男兄弟）**等の炊女として造り奉らん」と奏った。**

喜田説は、天智崩御後671年12月から壬申の乱672年９月までの間、
倭姫王皇后＝太后天皇＝仲天皇＝女帝が、即位していたとする説。

①野中寺弥勒菩薩像銘が示す「中宮天皇」

天智・天武の時代に九州王朝の女帝がいた

喜田説は、天智崩御後（671年12月）**から壬申の乱**（672年９月）**までの間、倭姫王皇后が、即位していたとする説。しかしそれでは、期間が合わない。**

『懐風藻』釈**智蔵**伝

智藏師者俗姓禾田氏、淡海帝世遣學唐國時、吳越之間有高學尼法師就尼受業。
六七年中、學業穎秀（中略）

太后天皇世、師向本朝同伴登陸、曝涼經書。法師開襟對風曰、
我亦曝涼經典之奥義。
衆皆嗤笑、以為妖言。臨於試業、昇座敷演、辭義峻遠、音詞雅麗、
應對如流、皆屈服莫不驚駭

帝嘉之拜僧正。
時歳七十三。

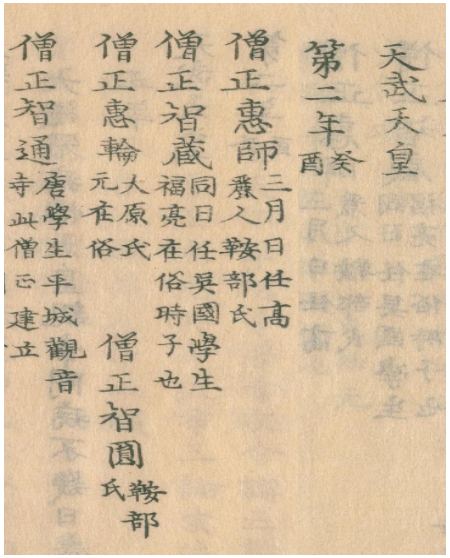
智蔵師の俗姓は禾（のぎ）田氏である。
淡海帝の世に、唐に遣学した時に、
呉越の間に高学の尼有り、この尼に就いて業を授かる。６～７年学び学業すぐれる。（中略）

太后天皇の世に、師は帰国した。

同伴陸に登りて経書を虫干しす。
法師襟を開きて風に対して曰く、我もまた経典の奥義を虫干しすと。衆皆嘲笑し以て妖言と為す。
業を試されて座に昇りて説く。辞義すぐれ雅麗で、流れる如く応対し、皆屈服して驚かないものなし。

帝（太后天皇）はこれを褒め、僧正に任命した。時に73歳。

『僧綱補任』（群書類従より）
天武2年癸酉（673）に、
智蔵が僧正に任命されたとある



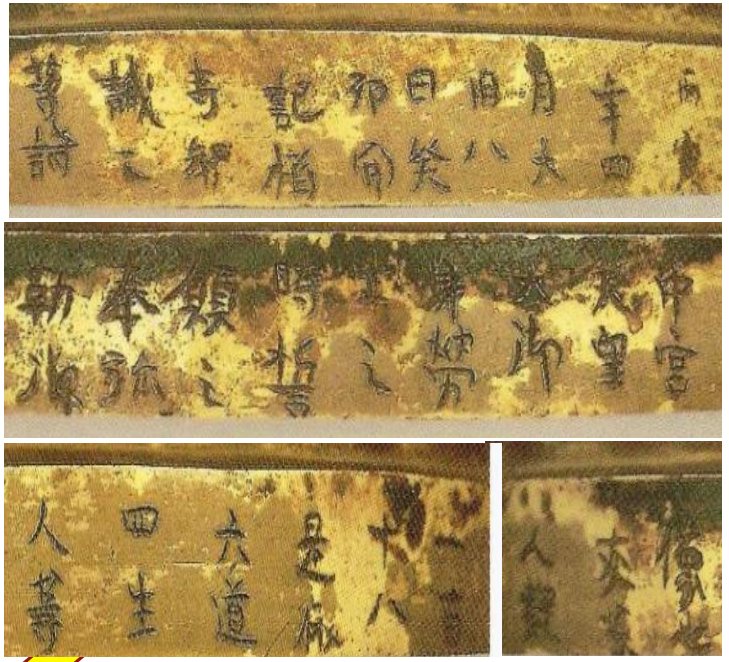
つまり、天武2年時の天皇は太后天皇となる。

①野中寺弥勒菩薩像銘が示す「中宮天皇」

天智・天武の時代に九州王朝の女帝がいた

大阪府羽曳野市の青龍山野中寺で、一九一八年に寺内の蔵から発見された金銅仏。この弥勒菩薩像の框（かまち）に刻字された銘文

野中寺弥勒菩薩造30.9ｃｍ



丙寅年四月大旧八日癸卯開記
栢寺智識之等 詣 中宮天皇
大御身労坐之時 請願之奉
弥勒御像也　友等人数一百十八
是依六道四生人等　此教可相之也

①野中寺弥勒菩薩像銘が示す「中宮天皇」

天智・天武の時代に九州王朝の女帝がいた

病気平癒祈願に、なぜ薬師如来ではなくて弥勒菩薩なのか

この世界で最後に悟りを開いたのは釈迦如来である。
次に如来になる（悟りを開く）のが弥勒菩薩である。
弥勒菩薩は既にこの世界で亡くなり、輪廻により
現在は天界の中の兜率天（とそつてん）に居る。

弥勒菩薩信仰には上生信仰と下生信仰の二つがある。
弥勒上生信仰とは、死後に兜率天にいる弥勒のもと
への往生を願う。病気平癒祈願には相応しくない。

弥勒下生信仰は、はるか未来（56億7千万年後）に
この世界に弥勒が下生することを待望するもの。
兜率天にいた弥勒が再びこの世界に下生すると、
この世界の物質は満ち足り、争い・苦悩ない浄土
となる。
弥勒は竜華樹のもと、3回にわたって説法し、
初会96億、2会94億、3会92億の衆生を導く。

弥勒の下生により苦悩のない
浄土到来を願う信仰

『仏説弥勒来時経』によると、弥勒が下生する日が
四月八日。その記念すべき日に像を奉っている。

◆～彌勒得道為佛時。於龍華樹下坐。樹高四十里。廣亦四十里。彌勒得佛時。有八萬四千婆羅門。皆往到彌勒所師事之。則棄家作沙門。彌勒到樹下坐。用**四月八日**明星出時得佛道。國王僧羅聞彌勒得佛。則將八十四王皆棄國捐王以國付太子。共到彌勒佛所。皆除鬚髮為沙門。復有千八百婆羅門。皆到彌勒佛所作沙門。彌勒父母亦在其中。復有聖婆羅門千八十四人。皆復到彌勒佛所作沙門。～

下生信仰で救われるのは、
一人中宮天皇にあらず、百十八人の智識衆、
そして六道四生すべてが導かれる。

銘文が刻まれたのは、天智５年(666)４月８日のことであった。

この銘文・造像は擬古作だと言う人がいる。

◆**「旧」の解釈は確定できない。**

東野治之氏は、これを旧暦の旧と読み、元嘉暦（旧暦）と儀鳳暦（新暦）の併用された持統四年（六九〇）以前の銘ではありえないとし、その結論は**「銘文が新たに撰文されたとすると、その時期は野中寺像が世間に知られる大正七年に比較的近い時点」とされた。**

しかし、その後の論争で偽銘・偽作（擬古作）説は払拭され白鳳期の仏像とする見方が大勢となっている。

旧と見える右側の字は日ではなくて、縦線が少し下方へ突き抜け、左にはねている。朔の省略字とする説もある。

大正時代に偽作する目的が無い。記紀と整合性のない偽作をする理由が見当たらない。

江戸時代の河内名所図会に記載ある。

「丙寅年四月大旧八日癸卯開記栢寺智識之等詣中宮天皇大御身労坐之時請願之奉弥勒御像也友等人数一百十八是依六道四生人等此教可相之也」

丙寅年四月八日、中宮天皇が病気回復を願い栢寺の信徒が詣で奉る弥勒像也。友ら百十八人。是れによって六道四生人らこの教えに相うべし。

西暦	五四六年	六〇六年	六六六年	七二六年	七八六年	八四六年	九〇六年	九六六年	一〇二六年
年号	欽明七年	推古十四年	天智五年	神亀三年	延暦五年	承和十三年	延喜六年	康保三年	万寿三年
干支	丙寅	丙寅	丙寅	丙寅	丙寅	丙寅	丙寅	丙寅	丙寅
月の大小	四月八日小	四月八日小	四月八日大	四月八日大	四月八日小	四月八日大	四月八日大	四月八日小	四月八日小
干支	庚辰	壬辰	癸卯	乙卯	乙卯	戊寅	庚寅	癸卯	甲寅
十二直	閉	閉	開	開	開	収	収	閉	開

4月8日が癸卯にあたるのは666年、月の大小・十二直も合致。

柏寺は平城宮にあった寺で、奈良時代の銘と言う人がいる。

◆「柏寺の知識」とは

大山誠一氏は柏寺を楢（なら）寺と読み、七二六年（丙寅）平城宮にあった寺で、長屋王の周辺にいた百十八人の知識衆とする。

しかし、楢とは読めない。

平城京に楢寺があった記録がない。七二六年でもない。

岡山県総社市（昔の賀陽郡）で柏寺廃寺があり、素弁蓮華文軒丸瓦の発掘もあり候補地の一つだが、発掘調査報告によると寺名は確定できない。

◆知識と言えば

仏教の信者が寺院や仏像の建立や、金品寄進すること、又は人。

続日本紀天平勝宝元年（七四九）聖武天皇は河内国大県郡の智識寺盧舎那仏を見て大仏造営を思い立つ。

◆柏は槲でもあり、柏でもある

『日本書紀』神代紀上「八岐大蛇の背に松・柏が生えている」と松と同じ常緑針葉樹としての槲の木を柏で記述する。

景行紀では「如柏葉而挙（柏の葉のように舞い上る）」と柏の葉を持つ落葉高木としての槲の木を柏で記述する。「かや」も「かしわ」も「柏」。槲は柏であり、柏は柏の俗字でもある。

ヒノキ科の針葉樹

イチイ科カヤ属の常緑針葉樹

ブナ科の落葉中高木

中宮天皇とは？

なかのみや天皇？　ちゅうぐう天皇？

同じ天皇？

大安寺伽藍縁起流記資財帳に現われる
斉明七年（六六一）の仲天皇は女帝

野中寺弥勒菩薩像銘より、
天智五年（六六六）の天皇は女帝＝中宮天皇

懐風藻・僧綱補任より、
天武二年（六七三）の天皇も女帝＝太后天皇

六六一年から六八三年まで、九州年号「白鳳」の時代である。
これらは『日本書紀』に現われる「倭姫王」のことではないだろうか？

野中寺近辺の智識衆が**中宮天皇**と呼ぶのだから、中宮天皇の居場所は太宰府では遠すぎるし、奈良の飛鳥でも少し離れすぎて違和感がある。この時期に飛鳥に都と呼べる条坊都市があった形跡が無いことは発掘調査の集積で自明である。**難波宮であろう**。天智五年（六六六）未だ難波宮が存在している。難波宮の火災は朱鳥元年（六八六）だ。翌年の六六七年三月に近江遷都となる。

この時期に中宮天皇が「大御身労坐（おおみいたつきいます）」とはどういうことか？　六六三年、朝鮮半島の白村江で大敗し、命からがら残兵が帰国した。六六五年、唐の高宗は倭国等の酋長を率いて泰山奉禅の儀式を行った。捕虜となって未だ帰還できない重臣がいたのであろう。

『日本書紀』はこの時期、如何なる人物の病気も伝えていないが、大軍を派遣した**倭国の女帝であれば**「大御身労坐」の極みであっただろう。

中宮天皇とは？河内の知識衆が奉納した像とすると、

天智・天武の時代に九州王朝女帝がいた

弥勒菩薩銘より、天智5年（666）の天皇は女帝＝中宮天皇

『懐風藻』より、天武2年（673）の天皇も女帝＝太后天皇

大安寺伽藍縁起流記資財帳に現われる　仲天皇も女帝である。

天皇、筑紫朝倉宮に御幸し崩じたまわん時、（中略）仲天皇は「妾も我妹（せうと）等の炊女として〜」

661年から少なくとも683年まで九州王朝女帝の時代

斉明天皇
天智天皇
天武天皇は、
九州王朝の
天子では無い。

九州王朝天子の崩御、新天子の即位の年もしくは次の年には、九州年号改元が必ず行われる。しかし斉明即位、天智即位、天武即位時に改元がない。

652年—白雉元年
655年—斉明天皇即位
661年—7月斉明天皇崩御。白鳳元年
668年—1月天智天皇即位
671年—12月天智天皇崩御
673年—2月天武天皇即位
684年—朱雀元年

白鳳年間

２、九州王朝最後の天皇の足跡がお寺の金石文に残る
②薬師寺東塔擦管銘が示す「中宮天皇」と「大上天皇」

２つの薬師寺、本薬師寺と平城京薬師寺

平城京薬師寺

本薬師寺（藤原京内に遺構）

薬師寺は、天武九年（六八〇）天武天皇の発願により、**藤原京**にて造営（以下**本薬師寺**と言う）が開始され、

平城京への遷都（七一〇年）後の八世紀初めに、現在地の西ノ京に**移転もしくは新造した**（以下**平城京薬師寺**と言う）とされる。

平城京薬師寺は現存し、本薬師寺は礎石など遺構が残るのみである。

薬師経の教え

薬師経典

①５世紀初頭、東晋の帛尸梨蜜多羅（はくしりみったら）訳の『佛説灌頂拔除過罪生死得度経』『灌頂経』
②615年、隋の達摩笈多（だつまぎゅうた）訳の『仏説薬師如来本願経』『本願経』
③650年、唐の玄奘訳の『薬師瑠璃光如来本願功徳経』『本願功徳経』薬師経と言うと大体これを指す。
④707年、唐の則天武后の時代、義浄訳『薬師瑠璃光七仏本願功徳経』『七仏経』

薬師経の教え

a、東方かなたに薬師瑠璃光如来がおられる浄瑠璃仏土がある。
　この如来は菩薩修行時に、12の大願を起しその全てを体得した。その12大願とは、
b、1ー三千世界を照らし衆生を悟りに導く。2ー瑠璃光を通じて仏性を目覚めさせる。3ー悟りを得るための物品を施す。4ー外道を正し衆生を仏道へと導く。5ー戒律を破った者を援ける。6ー障害・病気・身体的苦痛を癒す。7ー困窮や苦悩を除き払えるよう援ける。8ー女性の成仏のため男性への転生を援ける。9ー精神的苦痛・煩悩を浄化できるよう援ける。10ー衆生が重圧から解き放たれるよう援ける。11ー餓えと渇き衆生の苦しみを取り除く。12ー困窮・寒さの衆生に衣類を施す。
c、信心ある善き男女は、この仏の世界に生まれたいと願いなさい。「滅除一切衆生苦悩」の陀羅尼を唱えれば（108回の真言）、衆生の病苦は除かれ安穏の楽しみを受ける。
d、薬師瑠璃光如来の名を聞き、お姿を供養し、経典を読誦すれば、願いが満ち悟りに至る。
　餓鬼・畜生界におちた衆生も同じ。戒を犯した者も同じ。如来の大願の力で悪行を捨てれば救われる。
e、薬師瑠璃光如来の供養は、仏のお姿を造り、幡かかげ、七日七夜八正道を実践せよ。仏を称え、太鼓を打ち歌い仏像を右回りせよ。
f、救脱菩薩が阿難に、薬師瑠璃光如来を恭敬供養する方法・病苦から脱する法を説く。7日7夜昼夜6時の礼拝。
g、救脱菩薩が病苦から脱するために放生を説く。生き物を放して福を修めることを勧める。
h、救脱菩薩が七難を消滅させる方法を説く。支配階級が慈悲心を起こし、諸々の束縛を赦せと説く。

なぜ経典の話しをするのか？　例えば、法隆寺の薬師像は薬師像ではない

法隆寺の薬師像後背銘には、法隆寺創建の由来を刻む

しかし、法隆寺の釈迦三尊像と薬師像は、非常に似ている

なぜ薬師像か？

後背銘に薬師像と書いてあるから。

池邊大宮治天下天皇大御身勞賜時歲
次丙午年召於大王天皇與太子而誓願賜我大
御病太平欲坐故將造寺藥師像作仕奉詔然
當時崩賜造不堪者小治田大宮治天下大王天
皇及東宮聖王大命受賜而歲次丁卯年仕奉

七〇七年義浄訳『七仏経』で初めて薬師七仏が出てくる。それより百年前の薬師瑠璃光如来像には七仏はあり得ない。

用明天皇が病気の時、五八六年、推古天皇と聖徳太子に、平癒のため寺と薬師像を造るよう願われたが、果たされないまま崩じられた。後に、推古天皇と聖徳太子が六〇七年に建立し、大命を果たした。

釈迦三尊像と同じく法隆寺の再建後に像が持込まれ、その後に『日本書紀』の知識で造文刻字された。

なぜ経典の話しをするのか？　例えば、法隆寺の薬師像は薬師像ではない

法隆寺の薬師像後背銘には、法隆寺創建の由来を刻む

しかし、法隆寺の釈迦三尊像と薬師像は、非常に似ている

なぜ薬師像か？

後背銘に薬師像と書いてあるから

七〇七年義浄訳『七仏経』で初めて薬師七仏が出てくる。それより百年前の薬師瑠璃光如来像には七仏はあり得ない。

釈迦如来の光背は「過去七仏」
長阿含経、大本経等に出てくる

毘婆尸如来
尸棄如来
毘舎婆（浮）如来
拘楼（倶留）孫如来
拘那含（倶那含牟尼）如来
迦葉如来
釈迦牟尼如来

薬師如来の光背は「七仏薬師」
薬師瑠璃光七仏本願功徳経に出てくる

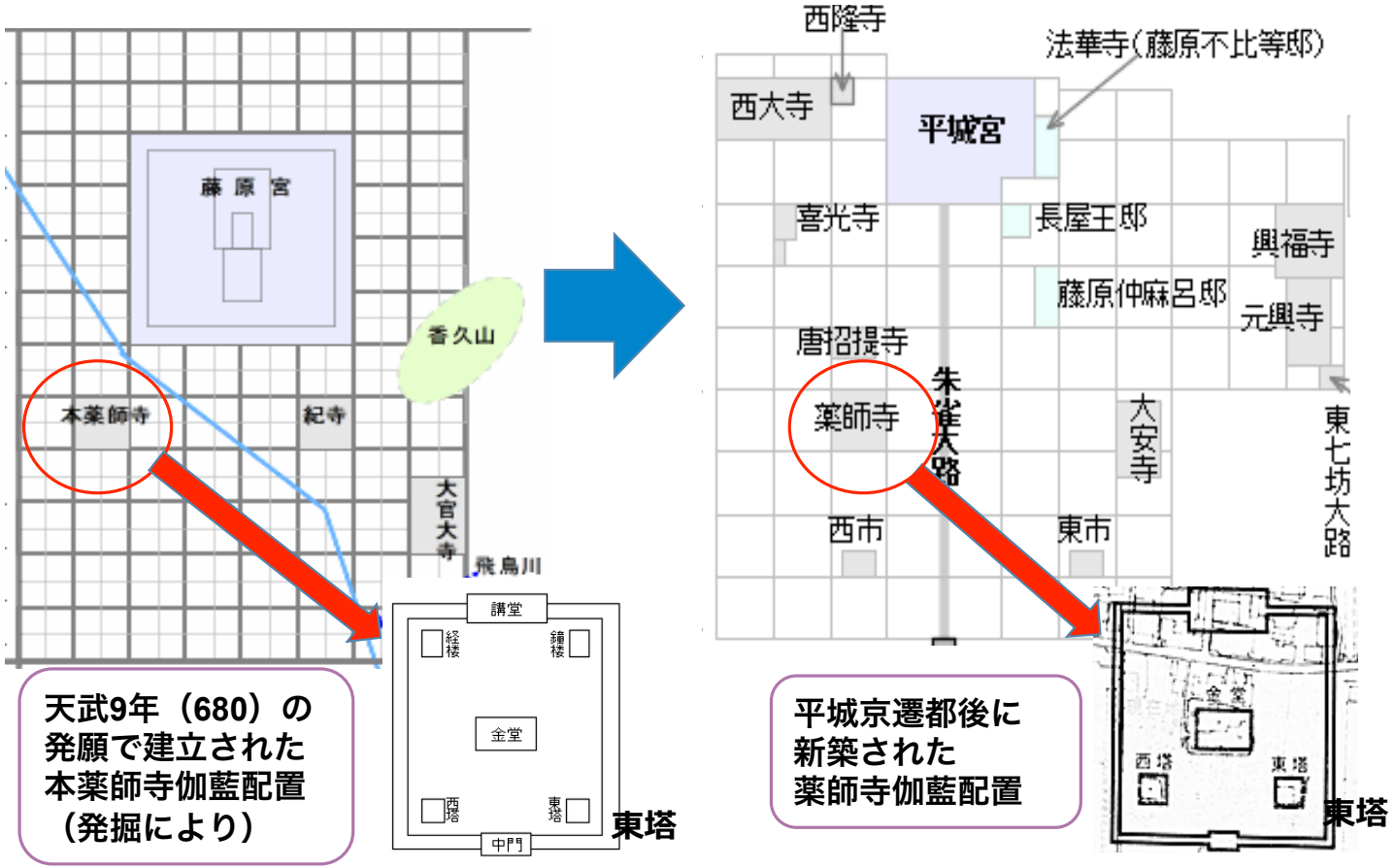
善名称吉祥王如来
宝月智厳光音自在王如来
金色宝光妙行成就王如来
無憂最勝吉祥王如来
法海雷音如来
法海勝慧遊戯神通如来
薬師琉璃光如来

薬師寺東塔擦管銘に最後の九州王朝天子が見える

藤原京の本薬師寺と、平城京の平城京薬師寺

発掘により

平城京薬師寺は、本薬師寺の主要堂舎の大きさ・伽藍配置までも忠実に再現されていた。



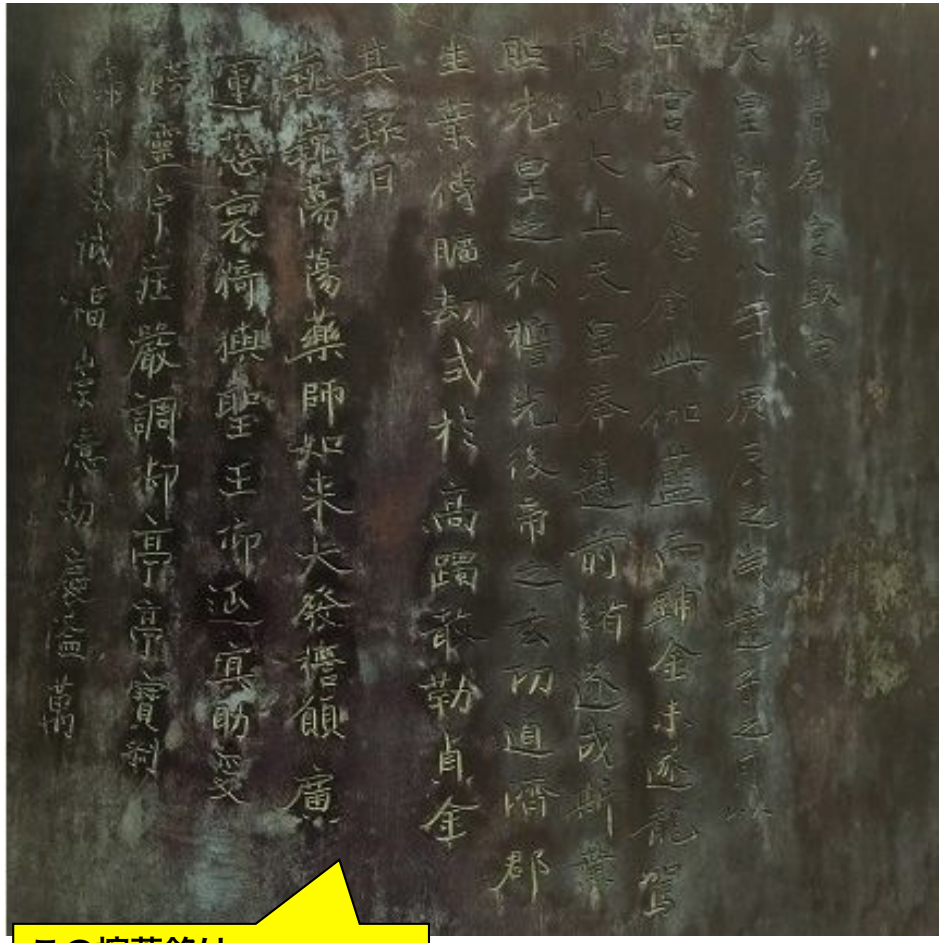
天武9年（680）の発願で建立された本薬師寺伽藍配置（発掘により）

平城京遷都後に新築された薬師寺伽藍配置

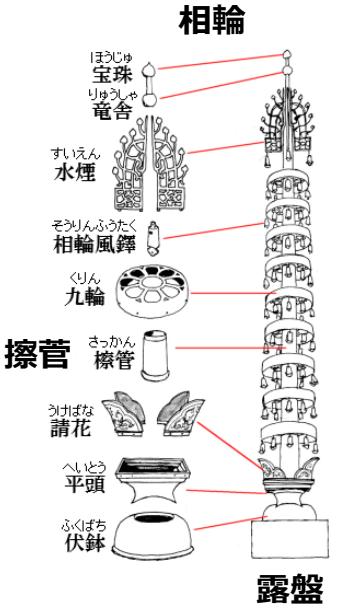
平城京薬師寺東塔擦管銘に最後の九州王朝天子が見える

薬師寺東塔の擦管に刻まれた銘

維清原宮馭宇
天皇即位八年庚辰之歳建子之月以
中宮不悆創此伽藍而鋪金未遂龍駕
騰仙大上天皇奉遵前緒遂成斯業
照先皇之弘誓光後帝之玄功道済郡
生業傳曠劫式於高躅敢勒貞金
其銘曰
巍巍蕩蕩藥師如来大發誓願廣
運慈哀猗與聖王仰延冥助爰
餝霊宇荘厳調御亭亭寶刹
寂寂法城福崇億劫慶溢萬
齢



この擦管銘は
いつ刻まれたのか？



◆これ、**清原宮馭宇天皇**の即位八年、庚辰の歳（六八〇年）十一月、**中宮**不悆（たのしまず）、この伽藍を創らんとしたが、鋪金未だ遂げざるに龍駕騰仙（天皇崩御）す。

大上天皇、前緒に従い奉り遂にこの業を成したまう。**先皇**の請願を照し**後帝**の深い功を輝かす。道は郡生を救い業は永劫に伝わらん。崇高な行いで敢て貞金に刻む。

其の銘に曰く、巍巍（ぎぎ）たり蕩蕩たり薬師如来、大いに誓願を発してひろく慈哀をめぐらし、ああ聖王を仰ぎ冥加を広めよう。ここに霊宇をかざり釈尊は荘厳なり。亭亭たる宝刹、寂寂たる法城。福は億劫に高く、慶は萬齢にあふれる。

維清原宮馭宇
天皇即位八年庚辰之歳建子之月以
中宮不悆創此伽藍而鋪金未遂龍駕
騰仙大上天皇奉遵前緒遂成斯業
照先皇之弘誓光後帝之玄功道済郡
生業傳曠劫式於高躅敢勒貞金
其銘曰
巍巍蕩蕩薬師如来大發誓願廣
運慈哀猗與聖王仰延冥助爰
餝霊宇荘厳調御亭亭寶刹
寂寂法城福崇億劫慶溢萬
齢

東塔擦菅銘の解読に諸説あり

各学者ともに、中宮は天武天皇の皇后つまり後の持統天皇の皇后であり、天武八年十一月に皇后の病気平癒を祈って発願された点については異論が無い。

その造営中に天皇が崩御し、逆に皇后（持統）により完成し、持統紀二年（六八八）に、この薬師寺にて無遮大会が行われている。

この大上天皇を持統と解するのが、移建説の平子氏田村氏と、非移建の会津氏足立氏である。喜田氏らは大上天皇・先皇・後帝は異なるとして元正天皇とする。

等々、擦菅銘の解釈により、平城京薬師寺東塔が移設されたのか新説されたのか、その時期は何時なのか、諸説乱立しているのである。

銘の起草刻入	東塔の建立年は	移建か非移建か	学説
文武朝	文武朝	移建	平子鐸嶺
聖武朝	天平2年（730）	非移建	喜田貞吉
文武朝	天平2年（730）	非移建	足立康
文武朝	天平2年（730）	非移建	会津八一
聖武朝初	天平2年（730）	非移建	藪田嘉一郎
文武朝	大宝年間	移建	田村吉永
11世紀	**天平2年（730）**	**非移建**	**町田甲一**

平城京薬師寺の東塔は、移建ではなく新築だった

2009年から始まった解体修理で答えが出た！

◆**東塔の天井板の伐採年が729年・730年、心柱の伐採年が719年**であった。
平城京遷都後の伐採なのだから、**少なくとも東塔は遷都後の新築。**

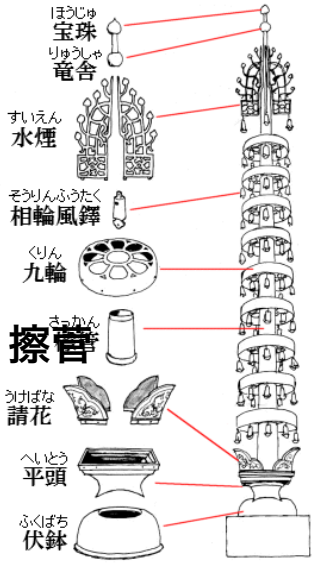
◆**天平2年（730）3月29日始建薬師寺東塔**　：『七大寺年表』の記述に信憑性があったことが判明した。

◆**流記云宝塔4基、2口在本寺**：『薬師寺縁起』が引用する流記より、天平19年（747）**本薬師寺にも2基塔があった。**

◆**『薬師寺縁起』（1015）**に、**本薬師寺の塔露盤銘**を引用。つまりこの時、**平城京薬師寺東塔擦管銘は無い。**

◆**嘉保２年（1095）**本薬師寺の塔跡より佛舎利を発見『中右記』。**1095年には本薬師寺の塔は失われた。**

銘の 起草刻入	東塔の 建立年は	移建か 非移建か	学説
文武朝	文武朝	移建	平子鐸嶺
聖武朝	天平2年（730）	非移建	喜田貞吉
文武朝	天平2年（730）	非移建	足立康
文武朝	天平2年（730）	非移建	会津八一
聖武朝初	天平2年（730）	非移建	藪田嘉一郎
文武朝	大宝年間	移建	田村吉永
11世紀	**天平2年（730）**	**非移建**	**町田甲一**



露盤

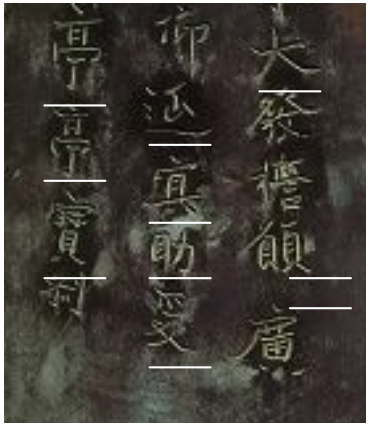
◆『薬師寺縁起』（1015）に、**本薬師寺の塔露盤銘**を引用。つまりこの時、**平城京薬師寺東塔擦管銘は無い。**

◆**嘉保２年（1095）**本薬師寺の塔跡より佛舎利を発見『中右記』。**1095年には本薬師寺の塔は失われた。**

町田甲一氏は、

擦銘の字数不揃い、字画・配字などの不整備、
行は曲がり天地揃わず、拙劣な銘文刻入を指摘して、

**東塔擦管銘は塔の完成後に、屋上に上がって、
足場の不安定な状態のもとに、
11世紀になってはじめて、
本薬師寺の露盤銘を参考に、刻銘された
と推測する。**



1、藤原京の本薬師寺の東塔に露盤銘文が先にあった。
2、この本薬師寺東塔が、1015〜1095年に失われた。
3、焼失した露盤銘を元にして、平城京の薬師寺東塔に足場の不安定な中、擦管に鐫刻された。

7世紀末に本薬師寺東塔露盤に刻まれた銘を、11世紀に薬師寺東塔擦管に新しく追刻した。
前段が長くなりましたが、
ここでその擦管銘の内容を見ていきます。

維清原宮馭宇
天皇即位八年庚辰之歳建子之月以
中宮不悆創此伽藍而鋪金未遂龍駕
騰仙大上天皇奉遵前緒遂成斯業
照先皇之弘誓光後帝之玄功道済郡
生業傳曠劫式於高躅敢勒貞金
其銘曰
巍巍蕩蕩薬師如来大發誓願廣
運慈哀猗與聖王仰延冥助爰
餝霊宇荘厳調御亭亭寶刹
寂寂法城福崇億劫慶溢萬
齢

これ、清原宮に馭宇（あめのしたしらしめし）
天皇の即位八年　庚辰の歳　子を建つる月、（天武九年・六八〇年　十一月）
中宮　不悆（たのしまず）　**この伽藍を創らんとしたが**、（天皇崩御）
鋪金　未だとげざるに　龍駕騰仙す。
大上天皇　前緒に従い奉り
遂にこの業を成したまう。（伽藍を完成させた）
先皇の請願を照し**後帝**の深い功を輝かす。
道は郡生を救い、業は永劫に伝わらん。
崇高な行いで、敢て貞金に刻む。
其の銘に曰く、
巍巍（ぎぎ）たり蕩蕩たり薬師如来、
大いに誓願を発して、ひろく慈哀をめぐらし、
ああ聖王を仰ぎ冥加を広めん。
ここに霊宇をかざり、釈尊は荘厳なり。
亭亭たる宝刹、寂寂たる法城。
福は億劫に高く、慶は萬齢にあふれん

実は、通説の解読では、おかしい所だらけだった。

皇后を中宮とする？　持統天皇は完成前に亡くなった？　一体誰が本薬師寺を完成させた？

これ、清原宮に　馭宇（あめのしたしらしめし）
天皇の即位八年（天武九年・六八〇年）　庚辰の歳（十一月）　子を建つる月、
中宮（たのしまず）　不悆　**この伽藍を創らんとしたが**、
鋪金（天皇崩御）　未だとげざるに　龍駕騰仙す。
大上天皇　前緒に従い奉り
遂にこの業を成したまう。（伽藍を完成させた）
先皇の請願を照し**後帝**の深い功を輝かす。
道は郡生を救い、業は永劫に伝わらん。
崇高な行いで、敢て貞金に刻む。
其の銘に曰く、
巍巍（ぎぎ）たり蕩蕩たり薬師如来、
大いに誓願を発して、ひろく慈哀をめぐらし、
ああ聖王を仰ぎ冥加を広めん。
ここに霊宇をかざり、釈尊は荘厳なり。
亭亭たる宝刹、寂寂たる法城。
福は億劫に高く、慶は萬齢にあふれん

①清原宮馭宇天皇を、通説では当然天武天皇と見なす。

『書紀』では、天武九年十一月　皇后が病気になり、皇后の為に誓願して初めて薬師寺を興し、百人の僧を得度させ、これによって皇后は平癒した」とある。

②中宮を、通説では持統天皇と見なす。

しかし『書紀』では持統は皇后であり中宮で無い。

皇后を中宮と呼ばない。中宮天皇の中宮ではないか。

―聖武の生母を中宮職が奉仕した七二四年以降、中宮が皇太夫人の呼称となった―

③この伽藍を創ろうとしたが、鋪金未だ　とげざるに龍駕騰仙す。通説ではこの主語を天武天皇とする。

しかし、そうであれば主語が無い文面でおかしい。

この主語を持統天皇としても、持統は薬師寺完成前に亡くなったことになるが、

『書紀』では、持統二年（六八八）正月「薬師寺にて無遮大会をいとなむ」とある。**持統は完成前に亡くなっていない。中宮は持統天皇では無い。**

②のように**中宮天皇とすればまともな文面となる。**

中宮天皇は伽藍完成を見ずに崩御したことになる。

実は、通説の解読では、おかしい所だらけだった。

皇后を中宮とする？　持統天皇は完成前に亡くなった？　一体誰が本薬師寺を完成させた？

これ、清原宮に　馭宇（あめのしたしらしめし）
天皇の即位八年　庚辰の歳（天武九年・六八〇年）　子を建つる月（十一月）、
中宮　不悆（たのしまず）　**この伽藍を創らんとしたが**、
鋪金　未だとげざるに　龍駕騰仙（天皇崩御）す。
大上天皇　前緒に従い奉り
遂にこの業を成したまう。（伽藍を完成させた）
先皇の請願を照し**後帝**の深い功を輝かす。
道は郡生を救い、業は永劫に伝わらん。
崇高な行いで、敢て貞金に刻む。
其の銘に曰く、
巍巍（ぎぎ）たり蕩蕩たり薬師如来、
大いに誓願を発して、ひろく慈哀をめぐらし、
ああ聖王を仰ぎ冥加を広めん。
ここに霊宇をかざり、釈尊は荘厳なり。
亭亭たる宝刹、寂寂たる法城。
福は億劫に高く、慶は萬齢にあふれん

④**大上天皇**　前緒に従い奉り遂にこの業を成したまう。

『書紀』『続日本紀』にも大上天皇は出てこない。

中宮天皇を引継いだ大上天皇が伽藍を完成させた。
中宮を九州王朝の天皇とすれば、この間に九州年号の朱鳥改元があるので、六八〇年（白鳳二〇年）に病気になった中宮天皇が、薬師寺の完成を待たず六八六年（朱雀三年改め朱鳥元年）七月までに崩御し、これを支えた天武もその年、病気になり相次いで亡くなったのだ。

先皇の請願を照し、**後帝**の深い功を輝かす。
道は郡生を救い、業は永劫に伝わらん。
崇高な行いで、敢て貞金に刻む。

先皇＝中宮天皇、後帝＝大上天皇となる。
ここには天武天皇も持統天皇も文武天皇も現われない。

2、九州王朝最後の天皇の足跡がお寺の金石文に残る

野中寺弥勒菩薩像銘が示す「中宮天皇」、薬師寺東塔擦管銘が示す「中宮天皇」と「大上天皇」

白鳳20年（680）11月、中宮天皇が病気になられた。
自らの病気平癒を願って本薬師寺の伽藍を創ろうとしたが、完成を待たず朱雀3年（686）に崩御した。

大上天皇がその意思を引継ぎ、遂に本薬師寺伽藍を完成させた。

先皇の請願を照し、後帝の深い功を輝かす。その崇高な行いは衆生を救い、その業績は永劫に伝わるだろう。
これを（本薬師寺の東塔水煙露盤に）刻む。

これが薬師寺東塔擦管に写された

王朝交代　前夜

665年 白村江敗戦後：唐が筑紫都督府設置→倭国と日本国が両立

日本国王＝中宮天皇、倭国王＝天武（明日香皇子）

672年 壬申の乱：大友皇子が中宮天皇を排除を計ったが失敗

日本国王＝中宮天皇を明日香皇子が支える
676年　唐は朝鮮半島より撤退：この頃、筑紫都督府も解消

678年～684年：筑紫大地震・白鳳大地震と大災害が続く
686年　：中宮天皇が崩御し大上天皇が即位、直後に明日香皇子も死去

六九七年　禅譲による王朝交代へと向かう

２、九州王朝最後の天皇の足跡がお寺の金石文に残る

西暦	九州年号	倭王	天皇家家長	事件
650年代	652白雉	伊勢王	孝徳	652年：難波宮完成、律令制の施行→→九州王朝の絶頂期
			斉明	
660年代				660年：百済滅ぶ
	661白鳳	中宮天皇	天智	663年：白村江の敗戦
670年代				
			天武	672年：壬申の乱 676年：唐は朝鮮半島より撤退　筑紫からも撤退？ 678年：筑紫大地震
680年代	684朱雀			684年：白鳳大地震
	686朱鳥	大上天皇		
690年代	695大化		持統	
				697年：禅譲、王朝交代
700年代			文武	700年：薩末比賣（さつまひめ）衣評督らが肥人（くまびと）等を従え、覓國使（くにまぎのつかい）刑部眞木等を脅かす。竺志惣領にこれを罰するよう命じた。

天智も天武も天皇では無かった。
この間の天皇は、仲天皇＝中宮天皇＝太后天皇　だった。

薬師寺東塔擦菅銘から、
中宮天皇は686年に崩御し、
大上天皇が即位したと見える。

評督らを従えた「サツマ姫」が、大和朝廷の朝敵として、『続日本紀』に現われる。大上天皇も女帝か？

『古代史の争点』出版記念講演会　2022　TOKYO

2022年7月31日

九州王朝の仏教　から王朝交代を語る

―　本薬師寺は九州王朝の寺　―

１、中国正史と全く食い違う『日本書紀』『古事記』

―記紀にある天皇称号は、『魏書』に倣ったもの―

２、九州王朝最後の天皇の足跡がお寺の金石文に残る

①野中寺弥勒菩薩像銘が示す「中宮天皇」

②薬師寺東塔擦管銘が示す「中宮天皇」と「大上天皇」

服部静尚